スピノザと中世のヘブライ文法論争⁽¹⁾
 ——『ヘブライ語文法綱要』の本文校訂のために——

Spinoza and the Medieval Dispute on
 Hebrew Grammar among Jewish Scholars

——Toward the Critical Edition of
Compendium Grammatices Linguae Hebraeae——

手 島 勲 矢^{*}
 TESHIMA Isaiah

ABSTRACT *Compendium Grammatices Linguae Hebraeae*, as written in Spinoza's final years, is a hurried sketch of Hebrew grammar. Not satisfied with the popular Hebrew grammar at his time, Spinoza tried to reform it with a logical-historical thinking, so much as to account for the arbitrariness of all exceptions, and to free the study of the language from the myth of Hebrew as "Holy Tongue". Modern critics, however, are quick to point out "mistakes" of Spinoza's grammar in light of today's understanding of Biblical Hebrew. Vloten and Land also shared the same critical view, so that they changed the text of the first print of 1677 in various essential points.

Questioning such a hyper-critical approach as of Vloten and Land who eventually made the "text" more sounding to the modern readers, the present author contends that Spinoza's grammar is misunderstood by modern critics due to the lack of attention to the medieval dispute on Hebrew grammar among the Jewish scholars; in particular, the paper attempts to illustrate the case with the Vloten's emendation which makes the text read "every shewa is a vowel which *cannot* be heard by itself," arguing that the emendation is wrong and unnecessary in light of the dispute between the two camps of medieval Hebrew grammarians (Joseph, Moshe, David Kimhis vs. the traditionalists such as Ibn Ezra, Abraham de Barmes) concerning the Hebrew vowels, and concluding that Spinoza responded to the medieval dispute by thinking of every shewa as "a vowel which *can* be

* 立教大学文学部・非常勤講師
 Lecturer, Faculty of Letters, Rikkyo University

heard by itself.” Thus, the paper demonstrates the significance of medieval Jewish sources to the study of *Compendium Grammatices Linguae Hebraeae*.

I. はじめに

病弱なスピノザは、晩年、自分の人生の終わりが近いことを自覚していたふしがあるが、その最後の貴重な地上の時間を哲学書の執筆でなくヘブライ語文法の執筆に費やしていたというのは、ある意味で、驚きでもあり、奇異でもある。⁽²⁾ *Compendium Grammatices Linguae Hebraeae* (『ヘブライ語文法綱要』) と呼ばれるこの文法書は、1677年のラテン語版遺稿集で初めて発表された。⁽³⁾ 1675年には完成させていたといわれる『エチカ』も、1670年に発表した『神学・政治論』への激烈な批判のため生前に上梓されることなく、やはりこの遺稿集で初めて世に出た。『エチカ』の事情と異なり、『ヘブライ語文法綱要』は未完であった。このことは、遺稿集の編者が序文で述べているだけでなく、スピノザ本人も「それについては、もっと長くシンタクスのところで述べる」と明言しながらも、該当する部分が書かれずに終わっていることから明らかである。⁽⁴⁾

『ヘブライ語文法綱要』の執筆事情をさらに窺い知るうえで注目すべきは、このスピノザのヘブライ語文法には、『エチカ』や『神学・政治論』に看取される、あのスピノザ固有の入念な叙述スタイルがみられないことである。普通スピノザは結論に先立って、そこへの到達過程を周到に説明し、『なぜその結論に至るべきなのか』の理由づけにおおくの議論を費やす。しかし、この『ヘブライ語文法綱要』では、綿密な「論証」を抜きに、結論だけがきわめて簡潔につぎつぎと提示されていく。この点に筆者は、限られた時を意識しながら自分の死期と競走するかのような筆のスピードとスピノザの焦燥を感じる。

しかし、この簡潔な叙述の特異性は、それほど自明でないかもしれない。特に、従来、⁽⁵⁾『ヘブライ語文法綱要』は初心者のための入門的な文法と片付けられてきた。しかし、中世ユダヤの文法論議を少しでも知る者にとっては、スピノザのヘブライ語文法の内容は見かけほど単純ではない。彼の単純明快な言葉の行間にはとても高度な議論が隠れている。まさしく時間さえあればどれだけでも、スピノザは彼の文法の見解をもっと弁明・説明したであろう。しかし、残念ながら、このようなスピノザの文法の評価はまだ一般的でない。それはスピノザの哲学のユダヤ的背景について様々な研究がある一方で、スピノザの文法

のユダヤ的背景を扱った本格的な研究は皆無であるからだ。⁽⁶⁾スピノザが幼いころより学んでいたであろうイブン・エズラやモーシェ・キムヒなどの中世ユダヤのヘブライ語文法学者が、何を問題にしていたのかを知ることはスピノザのヘブライ語文法の理解に本来欠かせない情報である。⁽⁷⁾否、それ以前に、こうした知識の有無は『ヘブライ語文法綱要』のテキスト校訂の問題を決定的に左右する。

II. フローテン版とシェバの問題

現在、『ヘブライ語文法綱要』の校訂テキストとして研究者の間で評価の高いのは、1833年のフローテンとラントの版である。しかしこの版は、初版の巻末訂正に加え、それ以外の幾多の固有の改訂も含んでいる。そのひとつの例が、『ヘブライ語文法綱要』の第三章「母音について：その形、名前、音価とその構成」にあるシェバの箇所である。⁽⁸⁾このフローテンたちのテキスト改訂を分析しながら、スピノザのヘブライ語文法のユダヤ的背景を考察して見たい。以下、テキストを引く。

Caeterum reliqua schevata semper corripiuntur, et apprime notandum, nos expresse monuisse, omne scheva pronunciandum vel initio, vel in medio dictionis occurrere. Nam in fine nunquam pronunciatur. Quod ut melius intelligatur, notandum hic est, quod scheva omne est absoluta syllaba, quae sola audiri 《non》 possit, sed semper vel antecedenti vel sequenti adhaerere debet; atque hinc fit, ut nullum monosyllabum schevate punctetur. Unde apparet, scheva correptum nihil esse quam e brevissimum praecedenti syllabae adhaerens; pronunciandum autem nihil aliud est quam e brevissimum sequenti syllabae adhaerens; quod quia ante syllabam sentitur, ideo ipsius pronuntiatio ⁽⁹⁾expressior est.

シェバについての議論で、フローテンたちは、初版テキストにはない《non》という言葉を独自の判断で付け加えて、quod sheva omne est absoluta syllaba, quae sola audiri 《non》 possit, 「すべてのシェバは完全な音節であるが、

それのみで聞くことは《できない》」を校訂テキストとした。しかし驚くべきことに、彼らは、この付加の根拠を示さない。ただ、脚注に「この否定の言葉が初版とパウルス版では削除された」という言及があるだけである。⁽¹⁰⁾このフローテン版が、モーリス・ブルームの英訳またジョエル・アシュケナジーのフランス語訳の底本として使われた。⁽¹¹⁾以下に、その部分のモーリス・ブルームの英訳を引用する。

For the rest, the remaining shevas are always silenced, and it should be especially noted that we expressly stated that every sheva which is pronounced occurs either at the beginning or in the middle of a word. But at the end it is never pronounced. That it may be better understood, let this be noted, that every sheva is an absolute vowel which can 《not》 be heard but must always adhere either to the previous or succeeding vowel; and so it is that no monosyllable is punctuated by a sheva. Hence it is apparent that a silent sheva is nothing more than the shortest e, adhering to the preceding syllable; however, the pronounced sheva is nothing else than the shortest e adhering to the following syllable; that is why when it is found before a syllable it is on that account to be pronounced even more distinctly.⁽¹²⁾

ブルームは、absoluta syllaba (「完全な音節」) を an absolute vowel (「究極的な母音」) と訳している。これはあながち誤訳ともいえない。なぜならヘブライ語のテキストは子音のみで構成され、母音はこれらマソラーの母音記号 (ニクダー) が教えるからである。ゆえに、スピノザが「シェバは完全な音節」というとき (音節は子音プラス母音であるから)、結局シェバは母音であるといっているのとひとしいのである。

シェバは母音である。しかしフローテン版の改訂に従うと、それは《それのみで聞くことはできない》母音という奇妙な矛盾した結論となる。ブルームはこの矛盾を解決するために、スピノザがシェバを「発音されるべき (pronunciandum)」シェバと「縮約された (correptum)」シェバに区別するとき、それは《有音の》シェバと《無音の》シェバのことを意味していると理解した。つま

り彼は、スピノザが「縮約された」シェバと呼ぶものを全部「無音の (silent)」と訳し代えたのである (引用下線部を参照)⁽¹³⁾。

しかし、このブルームの解決は新たな疑問や矛盾を生む。つまり《有音の》シェバと《無音の》シェバという区別は、中世の文法学者たちがシェバ・ナ (mobile) とシェバ・ナフ (quiescens) という用語で示した区別であるが、スピノザはこれらの用語を使うことを一貫して避けており、明らかにスピノザは自分のシェバの理解と過去の文法学者のシェバの理解の間に一線を引こうとしている。もしスピノザが同じような《有音の》シェバと《無音の》シェバの区別をしていたのだったら、なぜスピノザは「quiescens (静止した)」という用語を避けて、「correptum (縮約された)」という彼独自の用語に固執するのだろうか。さらに問題なのは、もし「縮約された」シェバが《無音の》シェバであるなら、スピノザが「縮約された」シェバも「発音されるべき」シェバも同じ超短母音「エ」であると教えるのをどのように説明しうるのか。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

ブルーム訳の混乱の原因は、フローテンが初版を「すべてのシェバは、それのみでは聞くことが《できない》完全音節 (母音)」と改訂したことにある。しかし、フローテンたちが付加した否定の《non》を取り除いて初版のテキストのように「すべてのシェバはそれのみで聞くことが《できる》完全音節 (母音)」と読めば難なくこの問題は解決される。つまり、スピノザの理解では《無音の》シェバなどありえないのである。シェバの記号があれば、それは完全音節であって、そこには必ず超短母音「エ」が発音される。しかしそのシェバの音は常に《その前の音節》または《その後続く音節》に結合していなければならぬから、「発音されるべき」シェバと「縮約された」シェバという2種類が生まれるのである。つまり先行する音節と結合した「縮約された」シェバの場合と、その後続の音節と結合した「発音されるべき」シェバの場合とでは、その超短母音「エ」の発音に違いが生じる。⁽¹⁶⁾「発音されるべき」シェバの場合は、その超短母音「エ」が先頭に立つのではっきりと発音される。しかし「縮約された」シェバの場合はその先行音節と結合するので、その超短母音「エ」は先行音節の影響で十分にできない、つまり「縮約された」のである。しかし、スピノザにとって「縮約された」シェバも完全音節 (母音) であって、それは私たちが考えるようなシェバ・ナフ (《無音の》シェバ) つまり子音で終わる「閉音節」のマークではない。スピノザにとって、純粹に子音で終わる音節とは1

音節の単語のような場合である。その場合、語尾にシェバの記号はついていない。⁽¹⁷⁾

III. 母音とシェバの理解：キムヒ以前とキムヒ以後

フローテンたちが初版のテキストを改変した理由は、スピノザのシェバの理解が彼らの知る聖書ヘブライ語文法とかけ離れていたからであろう。フローテンたちが知っていた文法とは、19世紀に入りゲゼニウスなどのキリスト教学者によって「批判的・科学的(?)」に研究された聖書ヘブライ語文法である。それに従えば、シェバは基本的に《母音の欠如》を意味する記号にすぎない。⁽¹⁸⁾ シェバを《完全な音節(母音)》と見なすスピノザの説明は、この時代のヘブライ語学者の目にも(またおそらく今日の専門家の多くにも)愚かなものに映ったことであろう。そこでフローテンたちは《non》という言葉を加えてスピノザの理解を少しでも彼らのシェバの理解に近づけようとしたのであろう。実際、スピノザ文法の論理性を調べたポルゲス(Porges)や前述のフランス語訳のアシュケナジー(Askénazi)などは、スピノザのシェバ理解を間違いと一蹴する。⁽¹⁹⁾

しかし、現在の《シェバは母音ではない》という理解は比較的に新しいもので、これは、ひとえに12世紀の文法学者ヨセフ・キムヒ、モーシェ・キムヒ、ダヴィド・キムヒなどのヘブライ語文法における《革新》に由来する。⁽²⁰⁾ しかしキムヒ以前の伝統的なヘブライ語文法では《シェバも母音のひとつ》であった。このことは、母音記号の発展の歴史からも明らかである。つまり、初期においては、パレスチナ方式でもバビロニア方式でも、シェバ・ナ的位置にのみシェバにあたる母音記号を記していた。ただその後、ティベリア方式において、シェバ・ナとシェバ・ナフの場所に同じシェバの記号が使われるようになったのである。⁽²¹⁾

伝統的な母音記号の理解は、アハロン・ベン・モーシェ・ベン・アシェル(10世紀)というティベリア・マソラー学者の『ディクドゥケイ・ハテアミーム』で定められている。その音韻論では主要母音7つを認め、これを3群に分類する。第1群は「ア」の母音のグループ(カマツ、パタフ、セゴール)。第2群は「イ」の母音のグループ(ヒリク、ツェレ)。第3群は「ウ」の母音のグループ(シュルク、ホラム)。これに補助母音であるシェバを加え、都合8つと教える。⁽²²⁾ (この場合、「シェバ」はシェバ・ナとハテフィームの総称として使う。)つま

り、伝統的な理解では、母音はすべて音質によって区別された。この母音の区分けは、ヘブライ語文法学者の「頭」であるユダ・ハユーシヤ、イブシ・エズラをはじめ歴代の文法学者が前提としてきたものである。

しかしキムヒ家の文法学者たちは母音のわけ方に、質だけでなく長さ、つまり長母音・短母音の区別も持ち込んだ。それは、キムヒ家の文法学者はテキストのクティブ（綴り）に注目したからである。⁽²⁴⁾つまり、綴字法上で子音文字ヨッドを伴ったヒリクとヨッドなしのヒリクがあるが、これは長母音と短母音の区別であると理解した。シュルクとクブツの違いも同様に説明された。ヴァブを伴うホラムやヨッドを伴うツェレからの推測によって、ホラムやツェレの母音記号は長母音を示すと考えた。こうやってキムヒ家の文法学者は、ギリシア語・ラテン語の母音構造に似た5つの音（ア、イ、ウ、エ、オ）とそれぞれの長短で、10の母音の体系を考案した。そしてシェバとハテフームは、その前後の音節の母音に従って生まれる音であって、シェバの記号自体には固有の音価はないと考えた。

IV. スピノザと中世のヘブライ語文法論争

16世紀に入りキムヒ家の文法が世に広まるにつれて、新旧のヘブライ語文法のくい違いはユダヤ教世界内で論争となって顕在化していった。⁽²⁵⁾キムヒ文法を批判したプロフィアット・デュランの『マアセ・エフォディ』（1503年）、キムヒ文法を改善しようとしたダヴィド・ベン・ヤヒヤの『ラション・リムディーム』（1506年）、デュランの批判に反論してのキムヒ文法を擁護したエリシャ・ベン・アブラハム・ベン・マタティヤフの『マゲン・ダヴィド』（1517年）など、この時代、キムヒ家のヘブライ語文法をめぐる多くの文法書が書かれる。

アブラハム・デ・バルメスの『ミクネ・アブラム』（1523年）もこの一連の文法論争の中で伝統的なヘブライ語文法を弁護するために生まれた一冊である。しかし、この文法書のユニークな点は、ダニエル・ボムベルグ（彼はキリスト教徒であった）の要請で書き下ろされたためユダヤ人以外の読者のために最初からラテン語訳が添えられて出版されたことである。⁽²⁶⁾つまり、キムヒ家の文法しか知らされていない当時のキリスト教徒のヘブライ語研究者にとって、これはかけがえのない一冊であった。⁽²⁷⁾だからスピノザが母音の議論の中でこのアブラハム・デ・バルメスに言及していることは偶然ではない。スピノザは、母音

にまつわる新旧両派の論争を知る者たちの要求を十分自覚していた。そしてスピノザの答えは、新旧文法の意見の合成であった。以下に、三者（キムヒ家、イブン・エズラ、スピノザ）の母音についての説明を並記する。

キムヒ家：カマツ（長母音の「ア」）、パタフ（短母音の「ア」）、ツェレ（長母音の「エ」）、セゴール（短母音の「エ」）、ホラム（長母音の「オ」）、ハタフ・カマツ（短母音の「オ」）、シュルク（長母音の「ウ」）、クブツ（短母音の「ウ」）、ヨッド付のヒリク（長母音の「イ」）、ヨッドなしのヒリク（短母音の「イ」）

⁽²⁸⁾
イブン・エズラ：単純母音、パタフ（「ア」）、ホラム（「オ」）、ヒリク（「イ」）：複合母音、カマツ（パタフ「ア」とホラム「オ」の複合）、ツェレ（パタフ「ア」とヒリク「イ」の複合）、セゴール（パタフ「ア」とツェレの複合）、シュルク／クブツ（ホラム「オ」とヒリク「イ」の複合）、ハタフ・カマツ（カマツと同じ構成だが、その音はパタフよりホラムに近い）

⁽²⁹⁾
スピノザ：カマツ（「ア」と「オ」の複合で長母音にもなり短母音にもなる）、パタフ（「ア」の短母音）、セゴール（「エ」の短母音、ギリシア語のエータに相当）、ツェレ（「ア」と「イ」の複合で長母音）、シェバ（「エ」の超短母音）、ヒリク（ヨッドが伴えば長母音の「イ」、ヨッドがなければ短母音の「イ」）、ホラム（ヴァウを伴えば長母音の「オ」、ヴァウがなければ短母音の「オ」）、クブツ（短母音の「ウ」、ギリシア語のウプシロンに相当する）、シュルク（「オ」と「ウ」の複合で長母音）

伝統的な母音の説明の特徴は、イブン・エズラに見るように単純母音と複合母音という概念で母音を質的に区分するのに対して、キムヒ家は母音を質的には5つの単純母音とその長短で説明する。そしてスピノザの説明は両者の特徴を兼ね備え、それによって新旧の説明が抱えている潜在的な問題にそれぞれ解決を与えようとする。例えば伝統的な説明であるイブン・エズラのセゴールの説明によると、それはパタフとツェレの複合母音ということであるが、結局ツェレがパタフの「ア」とヒリクの「イ」の複合である以上、さらにパタフの「ア」

と複合させることは大きな疑問である。⁽³⁰⁾しかし、キムヒ家の説明にも問題がないわけではない。キムヒ家の文法では、カマツという同じ記号が時には長母音の「ア」になったり短母音の「オ」になったりする矛盾がある。さらに問題は、同じ様な短母音の「オ」を表わす記号がふたつ存在しているうえに、それがホ⁽³¹⁾ラムと関係しているということだ。

スピノザの説明は、新旧両説の長所を選び合成することにより、こうした問題を解決している。例えばセゴールの説明では、スピノザはキムヒ家の文法に従いセゴールは短母音の「エ」と限定することの方がより合理的であるから、伝統的なセゴールの説明を退ける。しかし、スピノザはホラムについてはキムヒ家の立場を退けて、長母音「オ」であるとする代わりに、ホラムはヴァヴを伴うかどうかで短母音にも長母音にもなるとする。またカマツも《それは長母音にも短母音にもなりうる》と定義する。こう理解すれば前述のキムヒ家の文法の矛盾は解決される。また発音についても伝統的なカマツの説明(「ア」と「オ」の複合母音)を受け入れることで、なぜカマツが「ア」にも「オ」にも聞こえるのか説明する。このようにスピノザの説明は、綴りや母音記号とその発音の間により一貫性を求める傾向がある。⁽³²⁾この思考の線上にスピノザのシェバの理解もある。しかし《シェバは母音である》とするスピノザの説明は単なる伝統的な文法の請け売りではない。

伝統的な文法でシェバを母音の一つと数える場合、それはシェバ・ナの場合を指すのであって、同じシェバの記号が付けられていてもシェバ・ナフの場合は「無音」の状態、つまり、母音記号が何も付けられていない文字の状況と同じであるとする。キムヒ家の文法学者は、逆に、無音の状態がシェバの本当のすがたであると理解したのでシェバの記号を母音に数えなかった(つまりキムヒ家の文法は、無音のシェバが特定条件下においてシェバ・ナやハテフィームになると考えた)。しかし、スピノザは、シェバもその他の母音記号と同じようにどのような場合にも固有の音をもつ母音記号と考えた。つまりそれは、超短母音の「エ」であって、セゴール、ツェレと質において(「エ」という音で)同じグループに属する。ツェレは長母音の「エ」(アとイの複合からできる「エ」)、セゴールは短母音の「エ」、シェバはセゴールよりももっと長さが短い、超短母音の「エ」なのだ。⁽³³⁾

従って彼の文法には、シェバ・ナフ(無音の状況)は存在しなかった。スピ

ノザにとって、それまでの文法学者がシェバ・ナフと呼ぶものは、ただ「急がされて」発音された「エ」の超短母音であって、決して「無音」ではなかった。スピノザにとって「無音の」とは母音記号が何も付いていない状態のことをさすのである。それで、それまでの文法学者たちはシェバ・ナフを「quiescens」⁽³⁴⁾という用語で呼び表わしていたが、スピノザはその従来のラテン語用語をきけて、その代わりに「corruptum (縮約された)」という新しい表現を使う。つまりスピノザはこの新しい用語により、シェバ・ナフの状況でも音自身が消えてしまうわけでないかと暗に主張している。この記号と発音を一致させるシェバの理解は、スピノザの《ヒドゥーシュ》、つまり、いままでの文法にない彼独自の革新的なアイデアである。

V. これからの課題

スピノザに時が残されていたなら、なぜこのようなシェバの理解に至ったのかさらに説明していたことであろう。スピノザの文法は単なる素人の思いつきではなく、当時の文法学者の論争を踏まえて考え抜かれた、短いけれども高度なヘブライ語文法である。この認識に立つなら、私たちに可能であり当為であるのは、まず『ヘブライ語文法綱要』ラテン語テキストの確立である。確かに初版にある多くの錯誤は正されねばならないが、現在の聖書ヘブライ語文法の常識で本文を批判・改変するのは慎むべきである。なぜなら現在の聖書ヘブライ語文法は歴史的にはキムヒ家に始まるひとつの文法的な立場をア・プリオリに受け入れて発展してきた結果である（それは、ある部分とても合理的でもあれば他の部分まったく非合理的でもある）。スピノザの文法研究は、もう一度スピノザの初版のテキストの一言一言を大切にすることから始まる。つまり中世のヘブライ語文法論議の脈絡でフローテンの改訂を、「よし」は「よし」とし「いな」は「いな」としながら、もう一度吟味するのだ。むろん判断がつかない場合は、本文は初版のテキストをいかして脚注においてその問題と改訂案を述べる。いずれにしても、こういう中世ユダヤの文法論争を自覚した本文校訂の過程そのものが究極的には、なぜスピノザがそういう結論に落ち着いたのか——スピノザの語らざる論証の全容を再構築していく過程になるであろう。

注

- (1) 本論文は第39回大会における発表に基づくものであるが、紙幅上、発表の後半で扱った「名詞」の両性の問題とスピノザの歴史的言語アプローチの議論は割愛する。校正の段階で貴重な助言を賜った桜井直文助教授(明治大学)、守屋彰夫教授(東京女子大学)、高木久夫氏(国際基督教大学非常勤助手)に深謝する。
- (2) スピノザは「死期の近づいたのを知った時」著作と蔵書をアムステルダムに送るよう頼んだ。リュカス／コレルス(翻訳+解題 渡辺義雄)『スピノザの生涯と精神』(学樹書院, 1996年)の176頁を見よ。ヘブライ語から英訳されたゼエブ・レヴィ(Ze'ev Levy)の論文, "The Problem of Normativity in Spinoza's 'Grammar'" は, スピノザのヘブライ語文法研究の格好の概論である。Ze'ev Levy, *Baruch or Benedict—on some Jewish aspects of Spinoza's Philosophy* (New York: Peter Lang, 1995) の第6章(155-193頁)を見よ。N. Porjes, "Spinoza's Compendium der hebraeischen Grammatik," *Chronicon Spinozanum II* (1922) は, 現在のスピノザのヘブライ語文法の(低い)評価のもとになっている。
- (3) またスピノザは『国家論』も書きつつあったが, それも終わらせることなく死んだ。『国家論』は邦訳されているが, 『ヘブライ語文法綱要』の邦訳はまだ存在していない。ただし出版計画中の邦訳「スピノザ全集」には収録される予定と聞いている。
- (4) 遺稿集の編者ヤリーフ・イエレス(Jarig Jelles)の序文は訳出されている。リュカス／コレルスの5~9頁を見よ。また『ヘブライ語文法綱要』の9章を見よ。
- (5) 特に, J. M. Hillesum, "De Spinozaistische Spraakkunst," *Chronicon Spinozanum I* (1922), また J. Bernays, *Anhang zu Schaarschmidt* (Bonn, 1850) の195~203頁を見よ。
- (6) スピノザのヘブライ語文法は, シュロモー・ルビンが早い時期(1905年)にヘブライ語に翻訳して紹介しているが, やはり, この文法の評価の低さからイスラエルのヘブライ語学者はスピノザの文法に無関心である。唯一ヘブライ語では, M. Bar-Asher, "Spinoza's Compendium of Hebrew Grammar," *Spinoza Studies—Three hundred years in Memoriam* (ed. by A. Yassour, Z. Levy, and M. Strauss; Haifa; University of Haifa, 1978), 187-196があるが, しかしこれも, 現在のヘブライ語文法の立場からスピノザの文法を評価または批判するというものである。
- (7) レヴィタ版でモーシェ・キムヒの文法書やイブン・エズラの聖書注解書など多数のヘブライ語文献がスピノザの蔵書には含まれる。スピノザのヘブライ語知識は, 「エツ・ハイム」というアムステルダムのユダヤ教学校で得たものだが, この学校の教育程度の高さは有名で, 特にヘブライ語教育を重視して読み・書きだけでなく, 上級クラスではヘブライ語で議論し, 『レンブラントの生涯と時代』によれば, スピノザは思想を交換する場合ヘブライ語・ポルトガル語を得意としていたように伺える。リュカス／コレルスの214頁を見よ。
- (8) J. Van Vloten and J. P. N. Land(ed.), *Benedicti de Spinoza Opera* (Hague

1883) の第 3 巻, 255～356 頁。これはパウルス版を改訂しただけでなく、表の組み替えなど初版の形にもその改訂は及んでいる。ちなみに今日の学問的校訂版の標準とみられているゲプハルト版でも、シェバに関するフローテンのこの改訂を踏襲している (cf. Carl Gebhardt, ed., *Spinoza Opera*, Bd.1, Carl Winters, Heidelberg, 1925, p.626, n.295)。

- (9) Cap. III, “De Vocalibus; de earum scilicet figura, nomine, potestatibus, et proprietatibus,” フローテン版で 258～261 頁。特に, 261 頁を見よ。初版に従った (つまりフローテンの改訂を取り除いた) テキストの試訳「他方, 残りのシェバはいつも《縮約される》[シェバである]。そしてこのことは注意されていくべきで, 私たちも明らかに教えたことであるが, すべての《発音されるべき》シェバは語頭ないし語中にくるが, 語尾にくるものは決して《発音されない》[すなわち, 《発音されるべき》シェバではない]。これは理解されていたことで [またこれから] 注意されていくべきことだが, すべてのシェバは《それのみでも聞くことができる》究極的な音節であるが, それは常にその先行するまたは後に続く音節にびたりと密着していなければならない。それであるから 1 音節の単語ではシェバは記されないのである。だから明らかなのは, 《縮約された》シェバとは先行する音節に密着した超短母音『エ』に他ならないのであり, 《発音されるべき》シェバとはその後続く音節に密着した超短母音『エ』に他ならない。それでシェバが音節の前に発見される場合, それ自体そのためよりはっきりとした発音となるのである」
- (10) フローテン版, 261 頁, 下段を見よ。
- (11) モーリス・ブルーム (Maurice J. Bloom) の英訳は, *Hebrew Grammar [Compendium Grammatices Linguae Hebraeae]* (New York: Philosophical Library, 1962); ジョエル・アシュケナジ (Joël Askénazi) の仏訳は, *Abrégé de Grammaire Hébraïque* (Paris: J. Vrin, 1968)。この仏訳を助けたストラスブール大学の故アンドレ・ネエル (André Nehere) 教授は, 晩年エルサレムで過ごされたが, その時期筆者は度々先生のお宅で貴重な会話を交すことができた。その時の先生の燃えるような瞳のまなざしを忘れることができない。この論文を謹んでネエル先生の御霊前に捧げる。
- (12) ブルーム訳の 16 頁を見よ。
- (13) ただし, ブルームは初出のみ字義通り「hasten over」と訳した。
- (14) 「ヘブライ語文法学者は『縮約された』シェバのことをシェバ・ナフと呼び, 『発音されるべき』シェバのことをシェバ・ナと呼んでいる」とスピノザはいう。フローテン版の 260 頁, ブルーム訳の 15 頁を見よ。
- (15) スピノザは, シェバの記号により《より短い「エ」の音が表される》[sonus significatur brevior e] といった。セゴールはギリシア語の「エータ」に比し, シェバを「エプシロン」に比した。フローテン版の 258 頁を見よ。
- (16) 「発音されるべき」シェバとは, 語頭 (例, כְּרֵאשִׁית [bəreʕšit] の最初のシェバ) ないしは, 語中の長母音の後にくるシェバ (例, הֶבְבֵּאוּ [həbəʕu] のシェバ) または語

中でダゲシュを伴ったシェバ (例. **פָּקֶדוּ**)、またはシェバが二つ続く場合の二番目のシェバ (例. **תִּפְקְדוּ**) となる。つまり、「発音されるべき」シェバとは、後に続く音節に密着するシェバのことである。ゆえに, *omne scheva pronunciandum vel initio, vel in medio dictionis occurrere. Nam in fine nunquam pronunciatur* 『発音されるべき』シェバは語頭か語中にしか起こらない、語尾に「発音されるべき」シェバはありえない』とスピノザは考える。それに対して、「縮約された」シェバとは、先行する音節に密着する (例. **מִדְּבָר** のシェバは、先行する音節 [mi] に密着する [də] という音節である)。ゆえに, *adeoque in fine dictionis, sive post syllabam longam, sive post brevem, sive sub litera dageschata, sive leni, sive denique unum, sive duo occurrant, samper tamen corripitur*. つまり《語尾は、どんな条件下でも必ず「縮約された」シェバしかありえない》とスピノザは考える。つまり、語尾のシェバは、前の音節に従うしか選択がない (例. **דִּבְרָךְ**)。フローテン版の261頁を見よ。

(17) *atque hinc fit, ut nullum monosyllabum schevate punctetur*: このポイントは、非常に重要である。確かに、1音節の語尾は純粹に子音で終わる「閉じられた音節」である。しかし、シェバの記号は絶対に書かれない。例えば、**סב** を **סֶב** とは書かない (**סֵב** という例外もあるが、スピノザの立場からすれば2音節の単語となる)。もしシェバ・ナフが《無音の》シェバ、つまり閉じられた音節を示すマークであるのなら、なぜ最後の音節にもシェバを書かないのであろうか (なぜ **מִדְּבָר** [mid-bār] なら **מִדְּבָרֶ** としないのか)。しかし、スピノザのいうようにシェバ・ナフも究極的な音節 (母音) であるなら、**ִ** は、**ֶ** と違うということで納得がいく。またこのスピノザの説明に従えば **מִלְכִּי** や **בְּנִפְלִי** の第二音節冒頭の b, g, d, k, p, t にダゲツシュがないことも了解できる。

(18) ゲゼニウスもシェバ・ナフに母音的な役割を認めている場合があったが、カウチはそれを訂正するコメントを加えている。E. Kautzsch, *Gesenius' Hebrew Grammar* (Second English Edition: Oxford, 1910) の51頁(d)を見よ。このようにシェバの母音的な役割の理解は研究が進むに連れて否定されていく。そして最近ではシェバの音価ゼロが強調される。P. Joüon, S. J.-T. Muraoka, *A Grammar of Biblical Hebrew* (Roma, 1993), Part One の50頁を見よ。

(19) N. Porges の154頁を見よ。Joël Askénazi の48頁、下段の注34を見よ。

(20) ダヴィド・キムヒの『セフェル・ミフロール』, ヨセフ・キムヒの『セフェル・ガルレイ』, モーシェ・キムヒ『マハラフ・シュビレイ・ダウト』にキムヒ家の文法は集約されている。キムヒ家の文法の歴史的な位置づけについて, H. Hirschfeld, *Literary History of Hebrew Grammarians and Lexicographers* (London: Oxford University Press, 1929) の79~86頁を見よ。ゲゼニウスを始めキリスト教徒の文法学者は、ヘブライ語文法の研究史の始まりをキリスト教徒の最初のヘブライ語文法学者リュフリンにおく。リュフリンはキムヒ家の文法に影響された。

(21) T. Har-Zahav, *Dikduk ha-Lashon ha-Ivrit* (Tel Aviv, 1953), Vol. 2 の105~

- 114頁, 116~117頁を見よ。
- (22) D. Yallin, *Toldot hitpathut ha-dikduk ha-Ivri* (Jerusalem, 1947) の17~20頁を見よ。
- (23) ユダ・ハユージ (Judah b. Hayyuj) をヘブライ語文法の創始者と見る。これはイブン・エズラの意見。またそれは『ミクネ・アブラム』の意見でもある。H. Hirschfeld の35頁以下を見よ。
- (24) T. Har-Zahav, *Dikduk ha-Lashon ha-Ivrit* (Tel Aviv, 1953), Vol. 1 の207頁, Vol. 2 の115~116頁を見よ。『ミクネ・アブラム』のニクドットの項を見よ。
- (25) 上述, H. Hirschfeld の94~102頁を見よ。
- (26) ダニエル・ボムベルグ (D. Bomberg: 1549年から1553年の間に没) は, ヴェネチアで印刷業を営んでいた。キリスト教徒でありながら重要なヘブライ語の本を数多く出版した。校正者としてアブラハム・デ・バルメスやエリヤウ・レヴィタ, ヤコブ・ベン・ハイム・イブン・アドニヤフなど著名なユダヤ人学者がボムベルグの許で働いた。
- (27) キムヒ家の文法が広まった大きな理由に, エリヤフ・レヴィタ (Elijah Levita: 正式な名前は, エリヤフ・ハレヴィ・ベン・アシェル・ハレヴィ・アシュケナジ。エリヤフ・パフルとも呼ばれる。1469年~1549年) の影響がある。彼が注を付けたモーシェ・キムヒの文法書『マハラフ』(1508年) は小さくて手軽な文法書であるため好評であった (それは, スピノザの蔵書の中にも発見されている)。レヴィタの弟子によって彼の文法書はラテン語にも翻訳されてキリスト教世界にも広まっていった。
- (28) イブン・エズラの『トラー注解』の序文を見よ。アブラハム・デ・バルメスはイブン・エズラの解説に基本的には基づいている。以下はバルメスの説明: 単純母音, バタフ (「ア」), ホラム (「オ」), ヒリク (「イ」): 複合母音, カマツ (バタフ「ア」とホラム「オ」の複合), ツエレ (ホラム「オ」とヒリク「イ」の複合), セゴール (バタフ「ア」とツエレ「オ」「イ」の複合), シュルク (ホラム「オ」とヒリク「イ」の複合), クブツ (シュルクと同じ構成だが, その音はホラムよりはヒリクに近い), ハタフ・カマツ (カマツと同じ構成だが, その音はバタフよりホラムに近い)。『ミクネ・アブラム』のニクドットの項を見よ。
- (29) フローテン版の258頁以下を見よ。
- (30) バルメスは, ツエレはホラム「オ」とヒリク「イ」の複合母音と教えるので, セゴールはバタフ「ア」とツエレ「オ」「イ」の複合母音ということになる。これは, イブン・エズラの説明の矛盾を意識してのことと思われる。
- (31) 現在は, カマツの短母音の「オ」はカマツ・カタン, ハテフィームの「オ」はハタフ・カマツと名称上区別しているが, 中世の文法学者は, 両者をハタフ・カマツと呼んでいた。キムヒ家の文法では, ハタフ・カマツを短母音の「オ」, ホラムを長母音の「オ」と区別されるが, その場合, קָרַשׁ の複数形が הַקָּרָשִׁים であり, そして人称代名詞の語尾がつくと, קָרָשׁ という形に変化していくことは矛盾である。つまり, 単

数形では長母音の「オ」が複数形では短母音の「オ」になり、それも2種類の記号で短母音の「オ」を表現することになる。

- (32) スピノザにとって、ハテフィームは、短母音と超短母音であるシェバの中間にあたるものであるから、結果的に קָרַשׁ は短母音のホラム（「オ」）、קֶרֶשִׁי は短母音のカマツ（オミクロンの「オ」に近い音）、そして、הִקְרַשִּׁים はハタフ・カマツ（「オ」に近い音であるが、長さは短母音のカマツよりも短い）となる。このように、スピノザの方式では単数形も人称代名詞の語尾がついた場合も短母音の「オ」ということになり、矛盾は解決する。またひとつひとつの母音記号がその独自の音質をもつことになる。
- (33) フローテン版の260頁，上段を見よ。
- (34) ホラムのヴァヴを *vau quiescens* と呼んでいる。フローテン版の260頁，上段を見よ。